



豊友の息吹きをふくらませ 進化につなげよう

豊友会会報

大分市大字下郡496-38
大分県教育会館内
大分大学教育福祉科学部
同窓会「豊友会」
編集兼 園田和孝
発行人
TEL 556-0145
bundai-hoyu@fuga.ocn.ne.jp
印刷所
(株)明文堂印刷
TEL 533-8800

支部活動が 同窓力の支え



大分市中央支部のみなさん

明治28年、大分県師範学校同窓会発足。(師範学校は明治9年創設)

大学は、幾たびかの改組を重ね、教育と福祉の統合を図り、新たな視点に立った経営へと姿を変えてきている。

一方、平成17年、同窓会を愛称名「豊友会」に。園田和孝豊友会会長は「母校の創立と同窓会の誕生からいずれも百年以上の歴史と伝統を誇って

いる。改めて大先輩たちの強い絆と母校愛に敬意を表すと共に、これを継承する責務を痛感する」と、語る。

会報の「支部だより」には、「同窓の絆で大同団結」を語った支部活動の報告が目玉を引く。

市町村合併にともなう支部再編問題を乗り越えた支部には、「統合」で生じた課題解決の中に、また、地域色が滲んだ交流活動の中に。

存在感を 行動で

大分市中央支部(九一〇名 田崎 國男支部長)は、毎年、研修と親睦を目的に「バスでの見学ツアー」を実施。年代を越えた参加者同士の近況交換に同窓の絆が何え

県外支部 現職会員も

県外支部活動も、東京、関西、九州では、熊本・福岡・宮崎の各支部が故郷を思い、組織拡大に心を刻み込んでいる。

現職会員は、職場や地域支部で多忙な教育現場を背景に活動を支え続けている。

園田会長は「会員の減少、意識の多様化を受け、会員の交流、意志の結集に力点を置いた検討の必要性」を提起し、発展の構想に心を砕く。

随想

今、豊友会の使命を問う



顧問

古 屋 虔 郎

(昭和30年卒)

いまさらながら教育の偉大さ、しかし一方でその恐ろしさを痛感させられている毎日である。

一九七二年、今後の日中両国の平和と共栄を目的に日中友好条約が締結されて今年で40年経過する。この節目の年に尖閣諸島問題に端を発した中国民衆のデモ隊が暴徒化し、日本商社や商店を襲い破壊、略奪、放火とまさに国家の体をなしていない状況が連日テレビで放映されている。中国ではデモ参加者に手当支給、尖閣

社会のすべてが富国強兵、戦争へ突走った百年前の日本の歴史を彷彿させる。日本が現在、平和国家として世界の信頼を集めているのは、戦後一早くすべての教職員が平和憲

者が党首となり、尖閣問題を理由に軍備強化、教育政策の方向性や管理統制のいつか来た道を歩くことは断じて許してはならない。

教育とは真理追求の哲

学的営みであり、人間の命を守り、人間の尊厳を確立することなくしてはならない。教育が国家百年の大計に立つと言われるのはそのこと以外にない。自己保身のために仮想敵を作り、愛国教育という、まさに幼稚な政治手法である。

今まさにこの時、日本の教育はどうあるべきか大分大学豊友会は、何を、どのように発信するのか、全会員で徹底的に議論し、日本の方向性を誤らぬと

第5回 大分大学教育臨床フォーラム
(共催事業)

- 日時 平成24年11月23日(金) 13:00~
- 場所 大分センチュリーホテル
- 講演 ・山本 力教授 (岡山大学大学院教育学研究科・臨床心理士)
・上野徳美教授 (大分大学医学部・博士指導健康心理士)

「第5回大分大学教育臨床フォーラム」は、平成24年度大分大学学長裁量経費(社会連携事業)「教師が直面する心の諸問題に関するトータルサポート」(申請者:大分大学教育福祉科学部附属教育実践総合センター 渡辺巨・佐藤晋治)の一部として行うものです。

大分大学と同窓生との交流会2012
~懐かしい恩師・友との再会~

- 特別講演
・大分大学医学部附属病院・穴井博文教授 (15:15~16:05)

(1)交流会 (13:00~16:05)
○各学部等の現状報告 (13:25~)

- ・工学部
- ・経済学部
- ・医学部
- ・教育福祉科学部
- ・大学院福祉社会科学部
- ・在学生による現状報告

(2)特別講演 (15:15~16:05)
懇親会 (16:20~18:20)
・学長挨拶
・同窓会代表挨拶

日時 平成24年11月23日(金)
場所 レンブラントホテル大分 大分市田室町9-20
TEL 097-545-1040

傘寿

「涙」もろくなってきた。年令のせいもあるかもしれないが、涙を誘発する出来事が多くなってきた。医学的には、眼球の外側の涙腺から分泌される液体で、常には少量ずつ分泌されて目を湿し洗う役目があるとのこと。涙にかかわる熟語は実に多い。涙雨、涙霞、涙勝、涙川、涙声等々。また、古典の中にも涙を表現している場面が多数ある。源氏物語では、「涙に暮るる秋の月」「中宮は涙に沈み給へる」など。しかし、古今を問わず涙は、諸刺激や心の動きによるものである。考えてみると、私の場合は精神的な感動による涙であることはまちがいない。転倒してけがを何度もしたが、痛いこと、この上なしではあっても涙を流すことはなかったのである。

東日本大震災による悲しみや苦痛、オリンピックを通して努力の上に成り立った感動、挫折による厳しい反省などなど。

私の涙を誘発してくれたいものは、謙虚で、大きな表現はつかっていないが、心にストレートに響いてくるのである。事実を通して語りかけてくる。それが背景にある。それには比べ、政治にかかわる面では、涙を流したことがない。表現はいずれの場合も大げさであるが心に響かないのである。政治にかかわる涙を流したいものである。